PR 広告

コロナ禍の今、子どもたちのためにできること

コロナ禍に伴い、これまでのような日常生活が送れず、友達との交流も減って、精神的な不安を抱える子どもたちが増えています。播磨地域でサッカー指導を通し子どもたちの身体と心の育成に取り組む活動を行っているＮＰＯ法人スポーツクラブエストレラ理事長の樽本直記氏と、自らの不登校の経験を生かし、不登校新聞の編集長として多くの不登校の児童・生徒の取材を続けているＮＰＯ法人全国不登校新聞社の代表理事で編集長の石井志昂氏の対談を通して、なぜ子どもたちは心に傷を抱えるのか、そして悩みを抱えている子ども、親へのサポートのあり方について語ってもらいました。

NPO法人全国不登校新聞社 代表理事兼編集長　石井 志昂（いしい しこう）氏

1982年生まれ、東京都出身。中学2年から不登校を経験。16歳のころに不登校新聞に出会い、スタッフに。以来、不登校の取材を続けている。

NPO法人スポーツクラブ エストレラ理事長　樽本 直記（たるもと なおき）氏

1950年生まれ、兵庫県出身。1973年より県立姫路北高、県立福崎高、市立琴丘高、市立姫路高で教鞭。サッカー指導だけでなく、障害者スポーツ支援活動も行っている。

大人が子どもたちの素直な心をつぶしている

―子どもたちの心の問題に取り組むことになったきっかけは。

樽本　高校で43年間教師を務め、サッカー部の顧問も務めました。並行して、地域のサッカークラブの指導もしており今年で48年目になります。20～30代の頃は、サッカー部の全国大会出場を目指してがむしゃらに指導をしていたのですが、極度のストレスと睡眠不足から難病にかかり、医者から3週間の余命宣告を受けました。その後療養中にうつも発症しました。その時、今までの自分の指導はなんやったんやろうと思い、自分を取り戻すために指導法を変えることにしました。ぼーっとしている子どもには、以前であれば「何してるんや」と怒鳴っていたのですが「どうしたん？」と聞けるようになりました。それが45歳の時のことです。教育カウンセラーの資格を取り、子どもたちが避難できる場所を自宅に1室や近所にある私有地に秘密基地を設けています。

石井　小学校5年生の時に親から言われて塾に通うようになりました。スパルタの塾で、講師から、私を含め成績順に並んだ後ろの席の子どもたちに「ここから下の人は将来ないよ」というひどい言葉を投げかけられました。その後必死に勉強をしたのですが、受験した学校は落ちてしまい、学力差別の意識だけが刷り込まれて生きる気力を失い14歳の時に不登校になってしまいました。19歳の時に不登校新聞に出会い、当事者、親、教員の取材に携わってきました。

樽本　石井さんのお話を聞いていて心が苦しくなりました。子どもって国の宝なのに近くにいる大人が子どもたちの素直な心をつぶしてしまっているんですよね。

石井　子どもたちに取材をしていて思うのは、皆学校に行くことが好きで、「青春（アオハル）」をしたいんです。部活、バンドに打ち込んで、友達を作って、先輩にあこがれ、後輩の面倒を見たいって思っているんです。ただ、学校から求められていることは違う。そのギャップに直面し、行きたかったはずの学校に行けなくなってしまうのです。

コロナ禍でストレスが増えた子どもたち

Q　子どもが心の悩みを感じるきっかけ、また近年特に気になっていることがあれば教えてください。

石井　原因はいじめ、部活での人間関係、家庭の問題などさまざまです。最近感じるのはいじめの低年齢化です。小学校1、2年生でも集団で無視したり、学級委員などの役割を与えて押し付けたりすることがあります。過度な早期教育の弊害も感じています。習い事ばかりで友達と遊ぶ時間がなく、苦しまざるを得ない状況に追い込まれています。

樽本　指導するサッカーでは、子どもたちが自立つと何を言われるかわからないから、キャプテンに手を挙げる人がいなくなりました。日替わりでキャプテンを決めるのですが、気をつけないと見えないところで集団でキャプテンをやらせようとすることもあります。子どもたちのプレーの技術、レベルはおしなべて上がっているのですが、強烈な点取り屋がいなくなったような気がしています。

―コロナ禍でどのような変化を感じましたか。

樽本　外で走り回っていたこどもたちが遊べなくなりました。仲間を作って大事な思い出を作る時期なのに、それができなくなってしまったことをとても心配しています。教師もマスク越しでは子どもたちの表情が読み取れなくなってしまい、より状況を難しくしているように感じます。

石井　元々学校に行きづらいと思っている子どもは全体の1割ほどいて、その中の2割くらいが不登校になっています。コロナ禍で残りの8割の子どもたちにもストレスがかかり、もう頑張れない、と瓦解していくように不登校が増えています。

身体が発するサインに気づき、逃げ場を作る

―そうした子どもたちにどのように向き合えばよいのでしょうか。

樽本　子どもは何かができたらうれしいんです。サッカーの指導では、できた時に「できたやん。明日またやろうな」と抱きしめてあげるんです。そうやって少しずつ自信をつけていくことで自分から動き出すようになります。

学校に行きづらい子どもたちが私の家に遊びに来ます。「不登校になったのは私の育て方が間違っていたのでしょうか」とお母さんの気持ちもいっぱいです。でも「一番苦しんでいるのは子どもです。生まれてきた時は「生まれてきてくれただけでありがとう」という気持ちだったのに、いつしか「あれもこれもができて」と親が期待のあまり欲がでて、それが子どもにとって重荷になってしまうので。子どもに逃げ場を作ってあげて、お母さんの愛情をたっぷり与えてほしい。お母さんが自分の味方だとわかると子どもは安心します。

石井　子どものSOSは頭痛や腹痛など身体からサインが出ます。親は子どもが学校に行きたくないというまで待つのではなく、そうしたサインに気づいて、今が子どもを守る時期だということに気づいてください。そして、学校に行くことだけがすべてではないということを受け入れ、子どもにも伝えられるようにすることが大切です。

樽本　学校に行きづらくなったら、学校に行くのと同じような時間に起き、家にいたいというなら好きなことをさせ、学校に行く気になったら、まずは車で校門まで行ってみるというように徐々に前に進むこと。そして1日に行っていから日記書き、それでコミュニケーションをとってみてと伝えています。

石井　樽本さんのように学校でも家庭でもない、違う価値観を持った第3の場所があれば子どもたちにとってのセーフティネットになります。おじいちゃんおばあちゃんのところでもいい、同じ趣味の仲間が集うネット空間でもいい。学校や勉強だけではない様々な価値観を知ることが大切です。

家でできることがあるとすれば雑談です。1日に5分だけでもいいのでゲームや動画の話題でもよいので注意するのではなく、「それは面白いの？」聞いてみることです。子どもから離れ、自分の時間を持つことも大切です。ずっと見ていると、いつになったら宿題を始めるんだ、とイライラしてしまうものです。

他人と比べず、本人の思いを尊重する

―心の悩みを抱えている子どもたちに対して伝えられることがあるとすれば何でしょうか。

石井　私は14歳の時不登校になって「人生終わった」と思いました。あの時にどんな言葉を言われたら救われたのかをずっと探し続けています。私と同じように不登校になった人たちの20年後を見てみると作家、会社の社長、タレントになった人もいます。特段成功しているわけではありませんが、可能性を失っているわけでもありません。この先どうなるのだろうと不安になっている子どもたちに対しては、他の人と同じように苦労もあるけど楽しいこともある。そして、普通のおじさん、おばさんになっているということを伝えてあげたいですね。

小学校1年生の時から不登校になり、サッカークラブが支えだった少年は、高校生の時にうつを発症しました。女子サッカーチームで練習しながら、プロサッカー選手になりたいという夢を追い19歳でスペインに渡ります。当初は6部チームからスタートし現在は4部まで4ステージを上げています。彼の話を聞いていると、他人と比べないこと、そして彼がサッカー選手になりたいということに対してだれからも批判されなかったことが財産になったと感じました。

樽本　石井さんにはぜひこれからも不登校などで苦しんでいる子どもたちがどのようなことに直面しどのような思いでいるのか、そして今のあなたのままで大丈夫なんだということを発信続けることがとても大切だと思います。

石井　ありがとうございます。私は、学校で学ぶ選択肢が広がればよいなと感じています。今は、学校に行って、決められた教室、机に座ることだけが勉強だということになっていますが、ＩＴを活用して家庭学習ができるようにしたり、フリースクールで学べるようにしたり、そういう選択肢を増やすことで子どもたちが少しでも安心して学べる環境を整えてほしいと思います。

対談を動画で視聴できます！

【第Ⅰ部】　【第Ⅱ部】　【第Ⅲ部】

パソコンは下記のURLより

第Ⅰ部 https://youtu.be/IcsugKPymSM

第Ⅱ部 https://youtu.be/ooY2WCH5_1s

第Ⅲ部 https://youtu.be/_y4lesCp02A

たくさんの企業のご協力により、この新聞紙面をつくることができました。

公益財団法人 グローリー小学生育成財団
坂上建設株式会社
株式会社 坂本建設
株式会社 兵庫分析センター
SHINSEI
KOGI 虹技株式会社
税理士法人 FLAP
セキスイハイム山陽
美樹工業
佐藤精機株式会社
ひろがる夢とたしかな未来 播州信用金庫
ALBION
Himejo 姫路情報システム専門学校
土地家屋調査士法人 飯塚昌弘合同事務所

（順不同）